

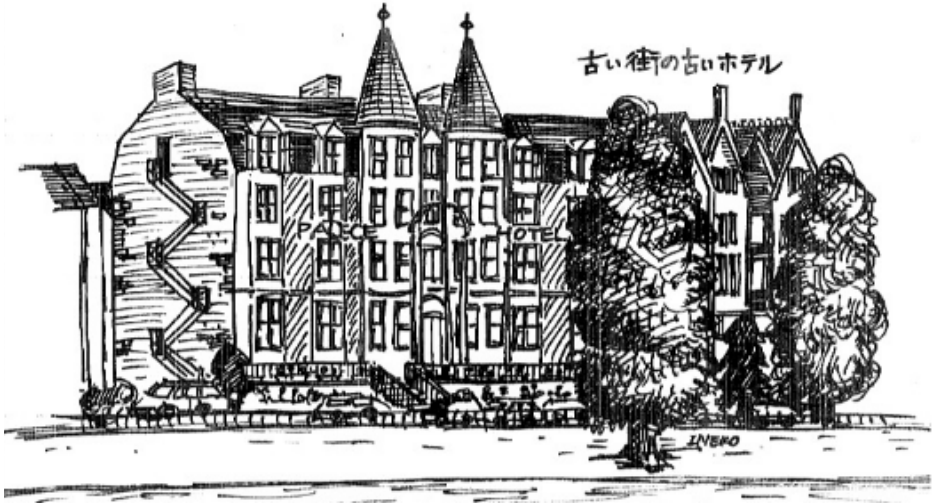
2007年10月15日発行（隔月刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2007年10月
第 6 4 号

漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



目 次

漢点字の散歩（3）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（60）（山内 薫）	5
酔夢亭読書日記（第23回）（酔夢亭）	8
一言（岡田健嗣）	9
見果てぬ夢を（7）（山本優子）	12
「東京漢点字羽化の会」第21、22回例会報告並びに 第5、6回「学習会報告」とわたくしごと（木村多恵子）	17
追悼、浦口明德さん	24
ご報告とご案内	24
漢文のページ	25
漢点字講習用テキスト（初級編・第5回）	30
編集後記（木下和久）	31

漢点字の散歩 (三)

岡田 健嗣



三 どうして？

識字教室の俳句作り

読売新聞大阪本社編集委員 橋本誠司

俳句作りをしている識字教室がある。その響きに引かれるものがある。大阪府南端の岬町を訪ねた。

識字教室は毎週木曜日の夕方に開かれる。そのうち第3木曜が俳句の日だ。

文字を書き写すだけでなく、月に1回は俳句で自己表現してみませんか。そう呼びかけて、町教委の岡田耕治教育部長（52）が昨年6月に始めた。

生徒は60歳代、70歳代の女性が多い。学校に行くより家の用事が先。幼い弟や妹の面倒を見るのが大事。そんな理由から、鉛筆を持っただけでしかられるような子ども時代を過ごした人たちである。

その日、教室にやってきたのは5人だった。みんな

なで思いつく限りの季語を書き出すことから俳句作りは始まった。花火、浴衣、かき氷、夏祭り…。
「昔は古い浴衣の生地をおしめにしていたねえ」。
思い出話に花を咲かせつつ、鉛筆を手に頭をひねる。

浴衣着てよそよそしきは若い腰

かき氷昔を思う星の下

「みなさん快調ですよ」と岡田さんの声が教室に響く。「次々書けるようになったのでおもしろい」と女性たちは語った。

長じて学び取った言葉だし、なにより俳句を始めて日は浅い。でも、句を詠むことそれ自体が楽しくてしょうがない。そんな表情に見えた。

2003年から始まった「国連識字の10年」の、今年は中間年である。ユネスコの推計（07年）では、読み書きできない大人が世界に7億8100万人、学校に通えない児童は約7700万人いるという。

せめて日本の子どもたちに、こうした現実と学ぶことの喜びを知ってほしい。識字教室の活気に触れて、思いをめぐらせた。

（読売新聞 2007年8月27日付夕刊「夕景時評」より）

この記事は、本会会員の木下さんが入力して下さったものである。あえて全文引用させて頂いた。

木下さんは、「漢点字の普及活動も識字運動と考えれば、このような活動とも共通項が見出だせるのでは」というお考えで、ファイルを送って下さった。

一般の健常者にも、文字を習得できないまま大人になった人が大勢おられることは、よく耳にする。つい最近、夫を送った老婦人が、夜間中学へ通い始めて、二度目の人生を生き生き満喫しておられる姿が、テレビで放映された。若い人（多くは学齢に十分勉強できなかった大人）に交じって、また昼間の中学生に交じって、体育祭に参加なさって、ご自身のできる限りを発散されておられた。将に童心に還ることの許された幸福を、テレビの視聴者にまで分けて下さったのである。

授業の風景も、英語や数学という、実際は必ずしも容易でない教科に挑戦する楽しさを、感じさせて下さった。

このような報道は、私の幼少時からテレビ・ラジオを通して、よく見聞きしていたように思う。「文字を知る」ということが如何にその人の一生に関わることか、あらゆる意味で人生を豊かに過ごすのに大きな力

を及ぼすかを、そのような報道では繰り返し訴えている。

我が国の識字率は九九・八%と言われている。しかしこの岬町で俳句の会に集うておられる方々は、「非識字者」には数えられていないはずだ。というのも、識字率は決して「文字の読み書きができる人」の数から割り出されたものではないからである。「初等教育修了者」の数から計算されたものである。家庭の事情その他で小学校に在学していてもまともに通っていない人も、卒業すれば「初等教育終了」と見なされる、そして「識字者」の内に数えられることになる。そのようにして本来六年かけて養われるはずだった読み書きや計算の力を得られぬまま社会の浪にもまれることになる。

私が盲学校の初等科に在学したのは、昭和三〇年代である。私は戦争を知らない世代であるが、戦後の混乱期の一端は知っている。横浜の野毛には闇市の名残があったし、横浜の広い地域が、米軍に接収されていた。現在根岸の森林公園として市民に親しまれている、元・根岸競馬場でも、アメリカ人がフェンスの向こうで、ゴルフクラブを振っていた。

そんな頃、現在と異なって学校に通えない事情を抱えていても珍しくない頃――勿論直後から始まる高度経

済成長によってそういう情況は雲散するのだが――、勉強したくともできない人たちは、小学校の修了証書をもらい、中学校へ入学し、卒業していったのである。

私が盲学校へ通うようになったころ、視覚障害者（当時は「盲人」と呼ばれていた）にも義務教育が施されるようになった。勿論学齢に達した子どもには、盲学校へ通うよう、役所から指導された。それまで学校と縁のなかった人たちにも、適当な学年に編入されるよう取り計らわれた。そうして盲学校の小学部の教室には、どのクラスにも、学齢の生徒に交じって、年配の生徒が沢山入って来た。かなりの年齢に達している人たちは、五・六年生に編入されて、直ぐに初等教育を終えていった。

……
しかし、なんでだろう？

幼少期、学業に恵まれなかった人たち、確かに「子どものころ勉強できていれば……」という思いは強いであろう。だから既に人生の終着点が見えようとしても、何かをやりたくなつたのではないだろうか？ しかも必ずと言ってよいほどに教育関係者が手を差し伸べている。

振り返って視覚障害者と言えば、触読用の文字で

ある〈点字〉には、〈漢字〉がなかった。日本語を、普通の文字（〈墨字〉と呼ぶ）と同じように表記できる文字がなかった。なかったときは「仕方がない」と言っていればよかった。

だが一九六九年に故・川上泰一先生が〈漢点字〉を發表されて、「文字がない」情況は變化した。「文字がない」情況は變化したが、なぜか習得し、学習や研究、職業に生かそうとする人は、極めて少数に留まっている。さらに教育関係者の積極的な関与も極めて少ない。

これはどういうことなのだろうか？

本会の活動の始めは、まず我が国の文化に触れる資料を作ろうというところから出発した。我が国の文化？ 私は色々考えた。恐らく冒頭の記事のような識字活動をテレビ・ラジオから聞き知っていたのである。視覚障害者が短歌や俳句を嗜む姿を思い出した。漢点字にするなら短歌や俳句の資料から始めるのがよいと思いついて、朝日新聞の「朝日歌壇、俳壇」の漢点字訳に着手した。私自身は短歌や俳句をやってみようという勇氣は持ち合わせていないが、この活動の中から、漢点字使用者で、短歌・俳句に造詣の深い人が現れて、漢点字による短歌・俳句の教室のようなもの

ができればよいが、と夢想もした。漢点字をよく知り、短歌・俳句にも通じた人が、漢点字を使つての「座」のようなものを企画してはくれないものか、そんなことを考えていたのである。

しかし程なくその夢想も「夢だった」と気付かされた。よく考えれば無理もない。視覚障害者誰しもが、文字を学ぶ機会がなかったのである。短歌や俳句の指導のできるほどの力を養う機会がなかった。一緒に漢点字で短歌・俳句運動を起こそう、とまでは行かなかつたのである。

一般の識字運動であれば誰かが音頭を取るにしても、教育関係者がその経験を生かして指導に当たるのである。また町には、一芸に秀でた人が溢れている。視覚障害者にもそういう人がいるはずだ、と考えた。それは間違つていなかったと今も思う。しかしそれまでの経験だけでは、漢点字を使用しての指導は、叶わなかつたのである。漢点字の力を付ける、という基本的な姿勢につまづいたのである。漢点字を学んでいながら、漢点字を使おうという気運が萎んで行くのを、そのとき感じざるを得なかつた。

そして漢点字使用者の多く、盲学校の先生からも、漢点字を使つて学習や研究を進めようという声を聞くことができなくなつたのである。

二〇歳代後半まで漢字を知らなかつた私が、漢字の知識を強く求めるようになったのは、社会生活では、言葉の使用がその帰趨に関わることを思い知らされたからに他ならない。社交場のレトリックのテクニクも必要だし、そういうものは習慣づけることで身に付く場合もある。しかしメッキは直ぐに剥げる。テクニクではない、何かもつと根っこを持たなければ、そう思うようになっていた。

社会生活とは直接繋がらないが、漢字の知識への要求の具体的な切っ掛けとなれば、幾つか挙げることができる。中でもそのままでは全くのお手上げのことであつた。

点字使用者なら誰もが感じていることであるが、英語の勉強に、点字の〈略字〉の習得が、案外大きな味方になつたのである。〈略字〉は、英語の綴りの法則をうまく利用したもので、フルスペリングではリズムカルな読みができなかつたのが、略字を使用した文章では、普通で速度で音読できるのである。しかも、英語の力も自動的にアップしたように感じたのも、錯覚ではないと思う。英米の点訳書は、この〈略字〉を使用しているのが通常であつて、「触読」を配慮してのことと謳っている。

このような英語学習の経験から、学生時代に勉強し

たドイツ語の点字も同じようにできてくるのか、ドイツ語も点字を勉強すれば、結構読めるようになるのか、やってみようと考えた。

しかしドイツ語の点字の解説書は、我が国にはない。翻訳されていない。勢い自ら翻訳しようなどという気を起こした。

しかしまたもや大きな暗礁を目の前にした。他でもない、国語の力不足で、思うような訳語が出て来ない。訳語ばかりでなく、ドイツ語の表現を日本語の表現に置き換える力がない。さらにドイツ語の基本構造の知識がない。原本を読みとる力がない。

例えば音節という概念、欧米の言語では基本構造となっている。が日本語では、外国語と比較する時以外には、あまり前に出るものではない。テキストには、二重母音を一音節と見るか、二音節と見るかと記されている。ドイツ語圏では常識かもしれないが、私には十分つまずきの石になった。

いづれにせよテキストの読み込み不足である。取りも直さず「国語力」の不足である。「隗より始めよ」、「国語力」を鍛えるところから始めなければならぬ。「国語力」と言えば〈漢字〉の力だ。

折良く漢点字の通信教育の募集記事に出会った。

(続く)

点字から識字までの距離(六〇)

山内 薫(墨田区立あずま図書館)

人名と漢字

『あけのほし』という点字雑誌がある。発行・印刷は、社会福祉法人ぶどうの木、ロゴス点字図書館で、毎月刊行されている。八〇ページほどのこの雑誌は、点字がオリジナルで、墨字版・テキスト版などは刊行されていない。従ってこの雑誌に掲載された記事を読むためには点字が読めなければならない。指か目で点字を読むか、点字を読める人に読んでもらうしかこの雑誌を読む方法はない。ところで昨年の五月から今年の六月まで、この雑誌に原稿を書かせて頂いた。基本的にはインターネット時代における漢字というような内容のエッセーを二千字程度で一年間という依頼だったが、途中全国図書館大会の報告なども含め、結局一回の連載になった。内容的にはこの連載で書いてきたようなことが中心だが、今回から数回にわたって『あけのほし』に掲載した原稿を発行者の許可をもらって転載したい。今回は二〇〇六年七月号に書いた「人名と漢字」を掲載する。

NHKの大河ドラマ「功名が辻」の主人公の名が

「やまのうち かずとよ」ではなく「やまうち かずとよ」と呼ばれていて、あれっと思つた方が多いのではないだろうか。土佐山内家宝物資料館によると山内家（やまうちけ）では、本家が「やまうち」、分家を「やまのうち」と呼んでいたそうで、名前も「かずとよ」ではなく「かつとよ」と読み、正しくは「やまうち かつとよ」ということになるらしい。作家の水上勉（みずかみ つとむ）も、かなりの間マスコミなどで「みなかみ つとむ」と呼ばれており、図書館の目録などでも「みなかみ つとむ」で通つていた。ところが、ある新聞のコラムに「最近作家のみなかみ つとむさんが、みずかみ つとむと改名したそうです」と書かれたことに対して、本人は「わたしは生まれてこのかた、自分のことを「みなかみ つとむ」と名乗つたことは一度もありません」という抗議文を送つたそう。戸籍には読み方まで記されていないので、こうした問題が時々生じることになる。

読みはともかく、現在日本では子どもの名前に付けることのできる漢字が制限されている。子どもにどんな名前を付けるかという時、姓名判断の本や漢和辞典を何度もひもといた人は多いと思う。にもかかわらず役所の窓口に出生届を出しに行ったら、漢字の問題で受理されなかつたというケースは意外に多いようだ。昭和二二年に公布された戸籍法第五〇条には「子の名には、常用平易な文字を用いなければならない。」と

あり、第二項に「常用平易な文字の範囲は、法務省令でこれを定める。」と書かれている。この常用平易な文字の範囲とは、「戸籍法施行規則」第六〇条で、いわゆる常用漢字、別表第二に掲げる漢字（いわゆる人名用漢字）、変体仮名を除く片仮名又は平仮名と示されている。従つてオバケのＱ太郎にあやかつて「Ｑ太郎」、俳優の名を真似て「Ｂ作」という名前の出生届けを出しても受理されない。

二年前の平成一六年九月二七日に、この「戸籍法施行規則」が改正され、人名用漢字が一举に四八八字も追加された。この追加によつて人名に使える漢字の数は合計二九二八字となった。もちろん仮名だけの名前もあるわけだが、明治安田生命が毎年実施している名前ランキング二〇〇五年を見ると、男子では百位以内に仮名だけの名前はなく、女子では二位「さくら」、十八位「こころ」、三二位「ひなた」、四五位「ひかり」、五五位「もも」、七二位「ほのか」の六つだけで、あとは漢字の名前となつており、いまだにほとんどの名前が漢字によつて付けられていることが分かる。ちなみに、この明治安田生命のホームページにある名前ランキングには、大正元年から昨年までの実に九〇年余りの各年の男女別名前のベストテンが載つていて大変興味深い。例えば大正年間の男子の名前ベストテンを見ると、なぜか「太郎」「次郎」ではなく、常に「三郎」という名前が上位に位置していたり、昭

和になったとたんに、昭和の昭に漢数字の一、二、三が付く昭一、昭二、昭三が現れる。また第二次世界大戦に突入していく昭和一四年から一六年までは「勇」（勇敢のゆう）が一位、一七年から二〇年までは「勝」（勝利のシヨウでマサルあるいはカツと読ませたか）がトップで、戦後二二年は「稔（ミノル）」（のぎへんに旁は念力の念）が一位となっている。また二〇〇〇年からは名前の読み方についても調査が行われているが、二〇〇五年の男子では「ユウキ」、女子では「ヒナ」がトップで、「ユウキ」に用いられる漢字の組み合わせは「優輝（優秀のゆうに輝くのき）」を筆頭に四八種類、「ヒナ」では「陽菜（太陽のように菜っ葉のな）」を筆頭に一八種類も様々な漢字が使われている。

今回、人名用漢字が一挙に増えた背景には、平成一五年一二月の最高裁判決の影響がある。札幌市の夫婦が生まれてきた男の子に「曾良（長野県の本曾の曾に良いという字で、奥の細道で芭蕉に同行した河合（かわい）曾良と同名）」という名前で出生届を出したが、この「曾」という字が常用漢字にも人名用漢字にも無かったため受理されなかった。夫婦はこれを不服として訴え、とうとう最高裁で「社会通念上明らかに常用平易な文字であり、子の名に用いることができ」と勝訴してしまった。そのために法務省は翌年の二月に、この字一字だけを人名用の漢字に追加するこ

ととなった。この時点で全国の自治体の窓口などに名前として使いたいと要望のあった人名に使えない漢字がおよそ千あったという。そこで法務省は「法制審議会人名用漢字部会」を急遽開催して、新たに五百二十一字を候補としてパブリックコメントを実施した。このパブリックコメントによって名前に使用する漢字としてはふさわしくないと批判の多かった、病気の「癌」や痔瘻の「痔」、糞尿の「糞」などが削られて最終的に四八八字が追加された。

しかし現在でも「国が人名に使える漢字を制限しているのは表現の自由を保障した憲法に違反する」という訴訟が係争中だという。一方で、平成一六年現在、戸籍をコンピュータで処理している自治体は四割ということだが、今後戸籍のコンピュータ化は加速度的に進むだろう。そうした時に制限が無くなれば、住民基本台帳の処理に支障を来すだろうことが容易に予測される。

今回の人名用漢字追加についての審議経過は、法務省のホームページ内にある審議会情報で読むことができる。また、この審議会委員を務めた漢字の研究者である阿辻哲次（あつじてつじ）著『「名前」の漢字学―日本人の「名付けの由来」をひも解く』（青春出版社 二〇〇五年）が、この間の経緯を詳しく解説している。興味のある方は是非一読されたい。

酔夢亭読書日記(第23回)

酔夢亭



某月某日。

カドを曲がった途端、がつんとぶつかつた。やけに固くて油っぽい奴だ。よくよくみれば、ぶつかつた相手はゴキブリではないか。

「痛いじゃないか、このゴキブリ野郎、すみっこばかり歩きやがって」

そう罵声を浴びて、我が身を振り返れば、なんとわたしはゴキブリになっていたのだとした・・・。

暑い夏でした。現役の世界チャンプにゴキブリみたいなボクシングをする、と嗤っていたええかつこしの芸人みたいなボクサーをわたしは嗤えなくなつてしまつた。

人類発生のはるか以前3億年前から生き続けている、色さえちよつと替えれば、玉虫と大差がないこの昆虫をなぜ、かくもわたしたちは蛇蝎のように嫌うのでしょうか？

「ゴキブリ取扱説明書」青木卓(ダイヤモンド社)。

たくましいゴキブリも今年の暑さには参つたよう

で、動きが鈍かつたようには思いません？

某月某日。

荒々しい自然の中に晒されると、人間だって本来の動物性があらわになる。人類の祖のアダムとイブがそもそも楽園を追放されているのだから、その後の子孫、末裔は苦勞を運命づけられているのは仕方ないことだろうか。彼らの長男カインは人類初の殺人者、弟殺し、嘘つきの始まり。「カインの末裔」有島武郎(岩波文庫)、「怒りの葡萄」スタインベック(新潮文庫)。

ところで、人間と動物に違いはあるか。違いがあるとしたなら、それは何か。

「人間は新たな価値を創造する存在である」産業財産権標準テキスト(社団法人発明協会)。

では、新たな価値を創造することができなければ人間ではないのか。わたしが食べ残したまぜい弁当をゴミ箱から拾い出し、遅い午後を撰っている年老いたホームレスは「新たな価値を創造する存在」であるのだろうか。この際、何もホームレスを引っ張り出さなくても良い。このわたしが「新たな価値を創造する存在」といえるのだろうか。

すべての人間が、ヴェインチ村のレオナルドであるな

らば、これはすばらしい。すべての人間には無限の可能性がある。そうであるか？すべて、ではないのは？

こうした疑問に具体的に答えていくだけの力量が今のおとなや社会にはあまりにも無さ過ぎる。まあ、これは人に求めないでわたしが考えていくことでありま

すが。
「ダ・ヴィンチ7つの法則」マイケル・J・ケルブ
(中経の文庫)。

某月某日。

「わたしに触らないで」。

いけ好かない奴とか、凶々しい人がべたべたくっついてきたり、なれなれしいとつい身を固くしてしまうことがある。これは人に対しての拒絶であります。

抱っこイヤイヤ赤ちゃん、なる現象があるらしい。

五感のなかで、触覚というものがわりと注目を浴びていないように思う。タツチすることで人間同士かなり親密になるわけで、「わたしに触らないで」という意識のありようはある意味心の病であるように思われる。

五感を解放し、満足させる生活方法について意識的になるべきですね。「五感生活術」山下柚実(文春新書)。

一言

岡田 健嗣

あるネコ好きの作家が半死半生のネコの赤子を見つけた。生まれたとたんに捨てられたかノラネコの子どもだったのだろう。

早速獣医の診察を受けて、何とか一命を取り留めることができた。

ところがどうやら目が見えないようだ。片方の目は眼球そのものがなかった。獣医は、全盲になるかもしれないと言った。

作家は獣医のもとへ日参して、治療に努めた。

作家は知人にその話をした。知人には全盲の子どもがあつたのだ。

知人は言った。「そんなに心配することはない、結構生きていけるものだよ。うちの子なんて、部屋に入つて来て、テーブルの前にぴたりと止まるよ。どうしてそんなことができるのか分からないけどね。」

ネコは治療の甲斐あって、片目の視力を回復して、ともかく全盲になることはなかった。作家は幸福を感じた。

以下次号

このようなエッセイを以前読んだ。

勿論これでめでたしめでたしとは行かないのかもしれない。しかしこのネコの一生はだいたいこれで決まったと言つてよいのではないだろうか。もし飼ひ主に恵まれなかったら、まず生き抜くことはできなかったであろう。このように愛情豊かな飼ひ主に出会えれば、たとい片目が見えなくとも、あるいはこの作家が心配していたように全盲になったとしても、それゆえに命を落とすことはないのである。

私がこの話を思い出したのは、この作家の心配の仕方と、その知人の反応のコントラスト——作家自身もそこに注目したのであるう——である。

このネコが全盲になったと仮定してみる。作家はうろたえる。全盲のネコの飼育の仕方など、誰も教えてくれない。何時も一緒にいることで、段々分かつて来る。そして普通のネコと変わらないというところに落ち着く、と私は想像する。知人が全盲の子どもを見る目と変わらない目で見ることになる。(勿論人の子どもとネコの子どもは一緒ではない。全盲であるのが共通するだけなのだ。)

このように全盲であるかないかは、個として見る限り、本来的問題とはならない、というのの一つの答えだろう。しかしこの作家はまずうろたえる。その知人

も恐らく当初はうろたえたはずだ。

私は長いこと視覚障害者であるが、残念ながらいわゆる健常者の経験がない。従つて健常者であつた者が障害を負う、あるいは健常者であつた家族が障害者になるという経験がない。従つて「うろたえる」から「受け入れる」というプロセスを知らない。その意味では、一般社会の健常者と変わらないとも言える。

私の世代は、「障害者は自立すべし」と言われて育つた。私の世代の数年上の世代の視覚障害者は、その多くが、白杖を持つて独り歩きすることがなかった。私の世代の前後になつて、一人で外へ出なければいけない、と言われるようになって、勇気を出して一人で外へ出ることが、生活圈を広くすることに繋がることを知るようになった。そうしてみるとそれが面白くてたまらない。何処へでも一人で行っちゃおう。つい先頃まで私もそのような生き方をしていた。

健常者の社会で障害者が生きる。福祉社会を標榜する現代社会では、よく「具体的なニーズを出して下さい。」と言われる。「理念や考え方という抽象論ではなく、個別・具体的な要望の形で表して下さい。」と。そしてバリアフリーとかで、色々な設備が整えられるようになって来た。

それは確かによいことだ。私もそう思うのだが…。

二つのケースを考えてみたい。

まず、駅のホームを全盲者が独り歩きするところである。

ホームには乗客が電車を待っている。電車を待つ客は、新たにホームに入って来る客のじやまにならないように立っている。新たにホームにやって来る客は、既に立って待っている客を避けながら自らの所定の場所を目指して歩く。

そこに一人の視覚障害者が白杖を振って登場する。

彼も歩行者であるから、立っている客を避けながら所定のポジションを目指したい。ところが中々叶わない、どうしても人にぶつかってしまうのだ。避けなければいけないのは現在歩いている彼なので、立って待っている客ではない。だが彼が歩む方向に、必ず客が立っている。ぶつからないときは、恐らく先方が先に見つけて避けてくれるのだろう、立って待っているにも関わらず、避けてくれるのだ。先に気付いてくれなかったり、避ける必要を感じてくれなかったりすれば、どうしてもぶつかってしまう。そうして人にぶつからない、人に避けてもらおう歩き方は許されないのである。

もう一つ、障害者の「自立」には、職業の自立が言われる。経済的自立である。自ら稼いで、生活を「経

営」する。

これは難題である。自ら稼ぐ、となれば、自ら仕事をしなければいけないことになる。それでは「仕事」と呼ばれる行為はどのような要素で成り立っているのだろうか？

よく「貨幣は社会の血液」だと言われる。社会を主体に例えればそう言えるのかもしれない。その言い方を借りて、それでは社会の「酸素」は何だろうか？言うまでもなく「情報」である。貨幣に情報が乗って社会を駆けめぐる。そんな中でビジネスマンたちは仕事をしているのである。

人にとって「情報」が具体的に現れるのは、「言葉」としてである。「言葉」は「文字」であり、生身の人間である。

障害者が経済的自立を目指す場合、このビジネス社会が行っている情報の交換を、一般のビジネスマンと同じレベルで処理しなければならぬ。

冒頭の、障害という現実の「うるたえ」から「受け入れ」というプロセスと、社会の中で生きるという現実には、どうやら大きな乖離があるようだ。もう一つの鎖の輪が、もう一つの架け橋が必要に思われてならない。が、それは何だろうか？

見果てぬ夢を（七）

山本優子

八 私塾開始



森山のついでで借りることのできた小さな一軒家は、今の神戸の湊町（みなとまち）というところにあつた。孝之進は、そこで開業する準備にとりかかった。

その地域は貧しく、ものも十分に食べられない子供たちがうろろしていた。盲児も結構いるということを知られた。泥棒も多いという。孝之進はまず安い治療費を掲げ、地域の人たちの必要を知ろうとした。治療の腕はすぐにはまらずの評判を得、口コミで治療を受けに来る人たちが増えていった。それからその知りあいの盲児が一人、二人、三人……と、孝之進の治療院に連れられて来るようになった。孝之進は、その子供たちに歴史や物理などを語って聴かせるようになった。

盲児が学べる教科書など全くない、点字もまだ世間に知られておらず、普及もしていなかった時代である。ちなみに日本式点字が石川倉次（いしかわくらじ）によって考案されたのは、一八九〇年（明治二十三年）だったが、その時から約十年たつていても、適

切な盲人教育の場がなかったために点字を使える者はほとんどいないという状況だった。

当時の日本の盲教育事情はたいへん劣悪なものだった。盲人の社会的地位は、明治維新までは皇室や徳川幕府の庇護のもと、それほど低いものではなかった。が、維新の際に保護や庇護は撤廃されて盲人の多くは職を失い生活に困るようになった。西欧文化の流入とともに盲聾教育の事情も紹介され、ようやく日本で初めて盲人、聾者のために京都盲啞院が設立されたのが一八七八年（明治十一年）だった。そして、十三年東京に樂善会訓盲院が開設され、篤志家や宗教家によって各地に設立されるようになっていった。が、後の明治三十七、八年ごろになつても全国に二十数校に過ぎなかった。しかも、これらは慈善主義的性格が強く、富国強兵の世相の中、ほとんど顧みられず、経営も極めて不安定だった。

そんな時代だっただけに、学校にも行けず、足手まといにされて家業も手伝えず、見えない悔しさやあきらめ、絶望の中にいた貧しい盲児たちは、孝之進のもとで学ぶのを何よりの楽しみにするようになりつつあるのが孝之進には伝わってきた。

荒井助二（あらい すけじ）、井上松二（いのうえ まつじ）、山本亀蔵（やまもと かめぞう）、前川守（まえかわ まもる）らだった。語られることをむ

さぼるように聴き、歴史上のあれこれなどをそらんじていく盲児たちを前に、孝之進の闘志はわきあがってきた。この子供たちが教養を身につけ、自立し、お国に貢献できるようにするために働く、それこそ自分の使命、生きる目的であると、改めて考えるのだった。

孝之進は鍼按業で得られる収入から、子供たちに必要な食べ物や着るものを与え、教えるという、私塾のかたちでこの教育を始めた。が、関心を寄せる人はほとんどなかった。むしろ世間の大半の人は、「見えないう者が学問を聴いて何になる？」と理解を示さないか、無視するかだった。あからさまな嘲笑さえ受けた。夫婦が食べていくのがやっとなという鍼按治療院の経営すら傾きかけた。盲児たちは、学問など無駄と周囲から止められて、あるいは連れて来る者がないために孝之進のもとに来ることができなくなっていった。貴重な仕事を減らしてまで私塾のために時間をあけていても誰も来ないという日が続いた。

「一人も来なくても、塾をやめてはいけない……」
孝之進は増江と自分に向かって、そう言い続けた。が、この私塾は失敗だったかという後悔も感じるようになっていった。増江は、

「新しいことを始めるには困難がつきものでしょう。なんとしても、続けましょう」

と、孝之進を励まし、自身も働きに出て、生活を支

えた。もう一人声援を送ってくれるようになったのは、近くの日本組合神戸多聞基督教会の老信徒澤井ウメだった。ウメは、孝之進が開業して以来時々治療に通ってきたが、自分の息子の一人が生まれつき見えなかったことを話した。学校にも通えず、家の中でひっそりと暮らし、胸を患い、療養所に隔離されて淋しく息を引き取った、という話を孝之進夫婦に涙ながらに語った。だから、盲児たちのために塾を続けて欲しい、そのために祈っている、と言った。教会の人たちに、孝之進から治療を受けるよう勧めてくれる大切な患者でもあった。教会でも孝之進たちのことを信者たちに祈ってもらうと、いつも繰り返した。それまで「耶蘇」というものに関心はあったものの何も知らなかった孝之進だ。

「耶蘇の中にも良い人はいるものだなあ」

と、増江に言うのと、増江は、はつきり言った。

「基督教が悪いと言われて、そう思い込んできたんじゃないでしょうか。知らんで、どうして悪いとわかりますか？」

「そのとおりだな」

孝之進は、聖書というものを読んでみたいと思いつめた。学生時代に少しは読んだことがあった。けれども、耶蘇の経典と思って身構えていたこともあり、あまり心に残っていなかった。しかし、今は、ウメが信

じている聖書を学んでみたいと本気で考えるようになった。だが、見えない孝之進には、自分で読むことはかなわぬ夢だった。

生活はますます苦しくなっていた。
さすがの増江も、とうとう言った。

「コウさん、いったん塾を閉じてはどうでしょうか？ 退却して態勢を立て直す勇気だって必要じゃないですか。このままじゃ、あなたが病気になるってしまいますよ」

増江にこれ以上苦勞させたくないとの想いで、孝之進は、第一回目の私塾を中止した。

九 邂逅

一九〇一年（明治三十四年）のことである。自分で読書をして新しいものを吸収したい想いが募るあまりに、孝之進はふさぎこんでしまうことが増えた。

孝之進の読書というと、増江に読んでもらうほかなかった。そんな孝之進の想いを知ったウメは奔走して点字板と点筆、紙などを手に入れ、孝之進に贈ってくれた。孝之進は表現し難いほどの喜びをかみしめた。さっそく増江と二人、点字を覚えることに取り組んだ。孝之進は、一日で五十音の書き方を覚えてしまった。が、読む方はなかなか思うようにはいかなかった。

「指の皮が分厚すぎるのかなあ。一皮むいたら読め

るようになるかなあ」

などと増江に冗談を言いながら、孝之進は寸暇を惜しんで点字に触っていた。増江も間もなく五十音を覚えて打てるようになり、孝之進と同じように触って読むことに挑戦したが、これに関しては忍耐力がなかった。

「わたし、いくら触ってても『イロハ』の違いすらわからない。ああ面倒くさい……」

孝之進はいらだつ増江の前に、笑いながらも考えた。

自分にとっては点字で読み書きできるかどうかは死活問題にも等しいほど大事なことだ。だが、見える増江は点字を知らなくても、自分が困ることはないのだ。嫌ならすぐに放り出すことができる。少し淋しくも思ったが、それだけに増江が点字習得に取り組んでくれていることに改めて感謝の想いを感じた。

来る日も来る日も、点字の説明書きに触れているうちに孝之進はゆっくり少しずつ点字を読めるようになっていった。初めて一枚の紙一面に打たれている内容を自分で読み終えたときには、孝之進は嬉しさのあまり涙がこみ上げてきた。

増江は、

「コウさんの指、すごい」

と、読み進むに従って何度も感嘆の声をあげて喜ん

でいた。が、そのあと、

「触って読むのはコウさんに任せます。私は見て読むことにしますよ。いいでしょう」

と、触読のあきらめ宣言をした。

孝之進は、しばらくは自分で点字を打っては読んで楽しんだ。ところが、せっかく読み書きが上達してきたのに、肝心の点字の本が一冊も手に入らない。点字の説明書きか自分が打ったもの以外何も読むものがないのである。そんな時、ウメが、言った。

「うちがお世話になつてる教会には新約聖書の『ヨハネ伝』ちゅうのんの点字版がありますね。ただ持ち出しがでけへんのですわ。いっぺん先生らご夫婦で教会まで来てみはったら、どないでしょ。教会では、好みに読めますんやけど。うちなんかはよう読まんけど」

ウメの話に、孝之進は天にも昇る心地がした。

夢にまで出てきてしまう点字本が近所にあつたとは！ と、心震えた。孝之進が後から知ったことであるが、「ヨハネ伝」の点字聖書は日本で初めて出版された点訳書とされている。横浜訓盲院で働いていたドレーバー宣教師の依頼で米国の聖書会社が製作、一八九四年（明治二十七年）に出版が実現したものだ。米国の耶蘇教徒が資金を出して、日本の数少ない点字を読める盲人のために聖書を点訳、出版したということ

に孝之進は心動かされた。彼らにはよほど大切な經典だからに違いない、読んでみる価値はあるはずだ、ウメはじめ、治療に通って来てくれている教会員の人たちへの感謝の思いも改めて伝えたいと、孝之進は思いを胸の内ですすうした。けれど、後ろめたいものも感じていた。点字の本であれば何でも読んでみたいという気持ちは確かにあつたが、お国に役立つ働きをしながらはという一貫した想いの中で、耶蘇の教えはそれと対極にあるに違いないと考えてきた。何か日本人として裏切り行為にはまっぴいりくような恐れを感じてしまふのだつた。

それでも、とうとう増江とともに孝之進が教会に足を踏み入れる日が来た。増江に手を引かれて教会の玄関をくぐる。西洋風のお寺のようなところを想像していたのだが、増江が、

「少し大きめの普通の家みたいですよ」

と、ささやいた。ウメが、待ち構えていたらしく、「左近允先生がた、よういらしてくれはりました」と、嬉しそうな声で迎えた。入り口近くに何人かの人がうろろろしているのを感じる。

会う人ごとにウメが「左近允ご夫妻」と、紹介するので、そのたびにお辞儀をしながら、照れくささを抱えてやつと中に入った。

孝之進が一言も言わないのに、

「これがヨハネ伝です」

と、分厚い大きな本を手渡された。はやる気持ちを落ち着けながら、孝之進は、地に足がつかない状態で、ささくれ立った畳の上に正座した。

前方にあるとされる十字架の方向に顔を向け、高ぶる想いを鎮めようと努める。オルガンのキイキイきしむ音。讚美歌であろう。鳴り響いていた。

礼拝が始まり、聖書が読まれ始めた。孝之進は、息をつめた。ヨハネ伝の九章だった。

「イエス途往くとき、生まれながらの盲人を見給ひたれば、弟子たち問ひて言ふ。『ラビ、この人の盲目にて生れしは、誰の罪によるぞ、己のか、親のか』」イエス答へ給ふ。『この人の罪にも親の罪にもあらず、ただ彼の上に神の業の顕れん為なり。……』」

孝之進は、身体が震えるのを感じた。自分が盲目となったのは、前世で何かよからぬことをしたからではない、親のせいでももちろんない、神の業があらわされるためであると……孝之進は一心に説教に聴き入った。集会が終わると、孝之進は、

「増江、牧師と少し話をしたい。連れていっておくれ」

と、言った。と、増江が泣いているらしいのを感じた。

「増江、どうしたのだ」

「今、確信できました。お国のためになる働きをするとなあなたが言うのをどうもしっくり感じなかったけれど、わたしたちは、わたしたちを創造された造り主のために生きるべきなんですわね」

「増江、お前もそう思ったのか。そうなんだ。そうだったのだ」

孝之進の内には、今までに感じたことがなかった喜びが湧き上がってきていた。孝之進と増江は二人そろってその日、キリストを信じる決心をした。

そして、一九〇二年（明治三十五年）には、共に洗礼を受けた。多くの信徒たちが見守る中、洗礼式を終えた孝之進は、その後の席で教会の人々に感謝の思いを述べた。家庭と教会を土台として、主である神のすばらしさをあらわすための盲人教育を目指したいという想いを語り、教会員たちに祈りの要請をした。新たな出発点であった。

二人は基督教入信に至ったことを、郷里への便りにしたためた。ところが、親戚縁者の間では大騒ぎになった。まだまだキリスト教を「耶蘇」と呼んで忌み嫌うべきものと思っている人が多かった時代である。それまでは孝之進のことを頼もしい、郷土の誇りとさえ言ってくれていた親しい者たちまでが、母千代に、

「左近允家（さこんじゅけ）かあ耶蘇を出したと

は！」

と、あからさまな罵りの言葉を吐いたりしたのを、千代は後になって孝之進夫婦に語った。千代はとうとういたたまれなくなり、一切を郷里に置いたまま、息子夫婦を訪ねて兵庫にやって来た。到着した千代は、孝之進たちの入信を快く思っていなかったはずだったが、

「お前たちがそれほど深く感じ入ったという耶蘇教を全く知らずに批判はできません。わたしも勉強させてもらいましたよ」

と、言った。そして、孝之進たちのところからそれほど遠くない商店に住み込みで働くようになり、日曜日は教会で孝之進たちと会った。また聖書の学び会にも出席するようになった。昔から一人息子の孝之進を理解した上で信頼しようと努め、黙々と支えてきてくれた母を孝之進は神に感謝せずにいられなかった。

後のことになるが、千代は、次第に一生懸命聖書を学ぶようになり、ついには信仰告白し、一九〇四年（明治三十七年）二月十日に受洗した。それからは孝之進夫婦に劣らないほど熱心な信徒となり、教会の地域分団集会（家庭集会）を自分の家屋を開放して定期的に開くようにさえなった。目立たない存在ながら、母千代は、多くの婦人たちの支えとなっていた。

（つづく）

「東京漢点字羽化の会」

第21、22回例会報告並びに

第5、6回「学習会報告」とわたくしごと



木村 多恵子

第21回例会、2007年8月8日（水、昼）

13…30 5 15…30

まず、8月の「学習会」の準備、送迎をして頂く方を決め、レーズライターに書いて頂く文字のことなどを相談、確認した。会員のお一人が、今回は道具を持ち帰って資料作りをしてくださることになった。

テキスト「散文編」の入力について詳細にわたって岡田さんと皆さんとの打ち合わせをしてくださった。

平仮名文には、漢字を少し交えた、「漢字交じり平仮名文」と、漢字・漢文を多く交えて、平仮名文と拮抗する、「漢字平仮名交じり文」の2種類があり、片仮名文にも、漢字・漢文を基調とする「片仮名交じり漢字文」と、片仮名を基調とする「漢字交じり片仮名文」と、片仮名と漢字・漢文に軽重の差がない、「漢字・片仮名交じり文」の3種類があるという。こんな複雑なものを、正しく書き分けるには、大変根の要る

仕事だと思う。皆さんのやり取りを聞いていただけで、「ああ、頑張らなければ」と新たに心を引き締められている。

もう一つ、今、手がけている本の入力方法についても、あちこちに齟齬が起らないように、これも細部にわたって検討して、時間は瞬く間に過ぎてしまっ

第5回「学習会」

2007年8月18日（土、夜） 18:30～20:30

8月の「学習会」に、どうしても出席できないので、何とか、会の模様を録音して欲しいとのご希望があり、検討の結果、「学習会」をスムーズに進めるために、プレクストークを使ってメモリーカードに録音した。録音後のデータ管理は、やはり岡田さんが行な

ってくださる。

以前に、会員から、録音をした方が良くいのではないか、という提案があったが、質問その他気軽に話

辛いのではないか、ということ、実行しなかった。

現に、今回その経緯を説明し、同意を得ようとした

ころ、室内はシンとして声が出なかつた。けれども、

岡田さんの話が始まると、だんだんあちこちから声が出るようになった。そんな自然体が一番よいように思

う。

今後、このデータをCD、あるいはメモリーカードで欲しいと言われる方が現れるかもしれない。どちらにしても、岡田さんに面倒を見ていただかなければならない。

学習内容は、前回のおおざっぱな復習をし、レーズライターで書かれた文字を見ながら、文字の元の意味を、岡田さんが説明し、その文字を使う熟語をみんなで探した。たとえば、「子」の使い道が多く、子供、様子、甲子園（こうしえん）、甲子（きのえね）、子午線（しごせん）などである。また、文字そのものの元の形、たとえば木の元の形を、会員に書いてもらったりした。そして、「元」と「本」の使い分けなどについても、岡田さんが解説した。

レーズライターで書かれた文字

金、木、草、犬、子

金は、金偏。木は、木偏。草は、草冠。犬は、獸偏として、漢点字も使われること。

木の近似文字として、未、末、本があることを、見本の漢字を見ながら、特に、未と、末がよく似ていること、どちらも「木」の横棒の下に、もう一本横棒が入るが、その横棒は、「未」のほうが「末」より長いこと、つまり、「未」の方は、上の横棒より下の横棒

の方が長いこと、「末」は上の横棒より下の横棒が短いので、上と下の棒の長さを比べることによって、「末」と「末」を区別することをみんなで確認した。木の字は、真っ直ぐ下に伸びた線と、その左右の斜めの線は、木の根を表し、横棒は、木の枝を示すのだという。そんな説明の後に、木の元の字の形を書いてもらった。木村は大樹が台地に根を張り、枝を広げている感じがした。

第22回例会、2007年9月12日（水、昼）

13・30～15・30

いつものように「学習会」の準備をし、レーザーライタ―での漢字も決まり、みんなで作り上げた。

テキストの中で意外に面倒な表が出て来て、担当者からの質問に対して、岡田さんが説明するのを聞いて、「とにかくやって、ファイルを送って、見てもらいます。」と言われた。

墨字の場合は、縦横を、きれいに、見やすいように表に書き表せるが、点字では困難、というより、ほぼ出来ないといった方が当たっている。従って縦の項目を一つ決めて、それに対する下の項目を、順次並列に書くしかない。あるいは、記号に置き換えて早わかりできるようにするなど、色々工夫をしなければならな

い。

その他、今盛んに入力中の本についても、更に入力方法について確認しあった。この本も手強いもので、出来上がったら、わたしにとっては、すばらしい参考書になり、楽しみである。本の帯では「小中学生向け」とあったが、とんでもない、高度な内容である。

皆様のおかげで、放送大学の筆記試験の合格通知をいただけた。パソコンの手ほどきから、実際のテキスト入力、校正、応援、励まし、全て皆様に感謝以外何も足も出ない。一文字一文字に、意味と読みがあることをまざまざと知らされた。

改めて申し上げます。

「皆様本当にありがとうございます。」

たった一度で喜んで、舞い上がってはいけないことは重々承知しております。しっかりと心を引き締めて、また一から始めますので、皆様どうぞ今後ともよろしくお願い致します。

第6回「学習会」、2007年9月22日（土、夜）

18・30～20・30、第一会議室

自己紹介と、前回「学習会」の復習は原則通り行なった。

新しい文字

都、(こざと・おおざと)、市、発、(発頭)、
食、(食偏)、馬、(馬偏)、田、竹。
田の近似文字として、由、曲。

こざとと、おおざとは文字の形は同じで、左(偏)にあると「こざと」、右(旁)にあると「おおざと」という。文字の形は同じだが、元の形と意味は異なるという。こざとの元の字は、「阜、ふ」で、山を表し、神が梯子を伝つて下りてくることを表すらしい。おおざとの元の字は、「邑、ゆう」(巴の上に口がある)で、人が集まる所だという。

「都」野も字を説明したとき、「京」の文字もレーズライターで書いて頂いた。この文字にも「みやこ」の意味がある。従つて、「京都」とは正にみやこである。

「食」は、「三角屋根の下に良」。

「馬」はたてがみをなびかせて走っている形。

「田」の話のとき、岡田さんは、「自然界には直線はない。田圃の田は確かに人が作り出したものだから、文字も直線で構成されている」と言った。

「竹」のところでは竹細工など、何があるか皆で探した。

* 予告

- 10月の例会(第23回) 2007年10月10日(水、夜)
18:30~20:30、7階第一会議室
- 第7回「学習会」 2007年10月20日(土、夜)
18:30~20:30、ヒューマンプラザ7階第一会議室
- 11月の例会(第24回) 2007年11月7日(水、昼)
13:30~15:30、7階第二会議室
- 第8回「学習会」 2007年11月17日(土、夜)
18:30~20:30、7階第一会議室

わたくしごと

「空札(からふだ)一枚(いちまい)、
いにしえの、奈良の都の八重桜、今日九重にはほ
いぬるかな」

と、なんとも伸びやかなゆったりした読みぶりで始まる「カルタ会」は、わたしの子供の頃の冬の遊びである。昭和24、5年頃からであっただろうか。わたしがほんの少しその遊びに加われたのは、流行(はやり)の終わりに近い29、30年頃である。

町内の何軒かを回り持ちの会場にして、町内の大人も子供もこぞつて集まり、「小倉百人一首」の札を取り合う遊びである。

百枚の読み札と、百枚の取り札が一セットになって箱に収められている。札一枚の大きさは、縦7・3センチ、横5・2センチ、厚さ約2ミリで、表に印刷された和紙が貼られている。

「小倉百人一首」は、藤原定家（1162〜1241）が選んだと伝えられているが、まだ定説ではないらしい。それはともあれ、万葉集をはじめ、あらゆる勅撰集その他から、歌の名手百人を選び、それぞれの代表作一首を集めたものである。ただ、どのような意図か、「小倉百人一首」としての統一見解があるのか、わたしには解らないが、原作に手を加えられている歌が多い。

読み札は、各一枚に、歌一首と、作者名と、その歌に相応しい絵が描かれている。

取り札は、歌の下の句のみが、見やすいように大きな文字で書かれている。

百枚の取り札の中から、適宜五十枚を、向かい合って座った二人に二五枚ずつ配られる。この各自与えられた札を「持ち札（もちふだ）」という。町内でのカルタ会では、大勢いるので、取り札を何組も並べる。

与えられた持ち札に書かれている下の句を確認し、その上の句を心にしつかり記憶し、自分が取りやすいように、効率よく並べる。つまり、読み手が上の句か

ら読み始めると同時に、如何に早く間違えずに、一枚でも多く取る工夫をする。自分の持ち札が先に無くなる方が勝者になるからである。もちろん、持ち札に無くて、相手方の領分から取ってもかまわない。それが正しい札なら、自分の持ち札を相手に一枚与えて、結果として自分の札が一枚減る。もし、相手のものに手を出して間違えていたら、「お手つき」といって、反対に相手の持ち札を一枚自分の持ち札に加えなければならぬ。

一人の読み手が、おおらかに格調高く、「空札一枚」の声で、読み手の好みの歌を読み上げる。（これは遊び、勝負？がはじまる準備で、ここでは誰もが歌の一首を聴いているだけである）。本格的に読まれる第一首の上の句の第一声を、固唾をのんで静まり、聞き漏らさない、自分の持ち札にあるものが読まれるか、ドキドキしながら待つ。

たとえば、読み手が、

村雨の露もまだ干（ひ）ぬ槇の葉に

霧立ちのぼる秋の夕暮れ

の「む」あるいは「むら」と第一声を上げれば、直ちに「あちこちから「はあーい」と声が挙がり、畳が叩かれる。（畳に札を並べてあるので、札を取る音が、畳

を叩くように聞こえる)。後はみんな静かに読み手の声に聞き入る。そして、下の句の「霧立ちのぼる」のあたりから、次に出る歌を緊張して待つ。

読み手が「あさぼらけ」と読み始めたなら、みんなは、次の「ありあけ」か、「うじの」が出るのを待たなければならぬ。それは、

朝ぼらけ有明の月と見るまでに

吉野の里に降れる白雪

朝ぼらけ宇治の川霧絶え絶えに

現れわたる瀬瀬(せぜ)の網代気(あじろぎ)

の二首があるからである。

最初に揚げた、「む」だけで取るのは、「む」ではじまる歌が、寂蓮法師の「村雨の露もまだ干ぬ槇の葉に霧立ちのぼる秋の夕暮れ」の一首しか無いので、迷わず、取り札の下の句の「霧立ち上る秋の夕暮れ」を取ればよいのである。

この最初の一拍を聴くだけで、取り札が決まるものが、俗に言う「むすめふさほせ」である。

住の江の岸に夜波よるさへや

夢の通ひ路人目よくらむ

めぐり逢ひて見しやそれともわかぬ間に

雲隠れにし夜半(よわ)の月かな

吹くからに秋の草木のしをるれば

むべ山風をあらしといふらむ

寂しさに宿を立ち出でてながむれば

いづくも同じ秋の夕暮れ

ほととぎす鳴きつる方をながむれば

ただ有明の月ぞ残れる

瀬を早み岩にせかるる滝川の

われても末に逢はむとぞ思ふ

(参照、峯村文仁(みねむらふみと)著、『百人一首』、1979年、筑摩書房)とある。ちなみに「あ札」は17枚あるので、「あ札」を空札に選ぶ読み手が多かったように思う。

父をはじめ、兄や姉は当然毎夜のように、近所の人々に行つてしまい、わたしは何時母と留守番であるが、我が家で行うときは、わたしも持ち札を分けてもらつて、自分の前に、とくとくとして、一番左は「めぐりあひて」、次が「春過ぎて」、その次は「淡路島」、「ほととぎす」と、自分が覚えた歌だけを注文

して、好きなように並べて、みなと一緒にやっている気になっていた。

今考えると、自分でも笑ってしまいが、わたしの領域には誰も入って来ないのだから、何の心配もなく、いや、ときとして、間違えていたとしても困りはしない。でも、わたしをかわいがってくれた、近所のおばさんはわたしが「はい」と取るたびに、きちんと「よく取れた」とか、「あつ間違えちゃった」とか言つて、自分も本当のカルタ会の仲間で試合をしながら、わたしの面倒も見てくれていたのである。

我が家でカルタ会をやるのは、一冬に一度か二度しかないが、毎日兄や姉や近所のおばさんに、これらの歌をそらんじるまで教えてもらっていた。

高校生になってから、『万葉集』を読んだとき、知っている歌が出てきたが、部分的に違うところがあることに気付き違和感をさえ感じた。しかし、教師の説明や、その後の細々ながらの学びの中で、古文書の写本の問題や、「百人一首」の成立課程も諸説あることなど、少しずつ解つてくると、これもおもしろいものだと思うようになった。なにしろ宗祇がまとめたという説もあったという。

なにより、もつとおかしいのは、このカルタ遊びがわたしの周辺だけで行われているのだとばかり思つて

いた愚かさである。それどころか、数百年前から我が国の正月遊びとして親しまれ、太平洋戦争の間中断されていたとは、当然子供の頃は知らなかった。更にカルタ遊びの原典は平安時代の「貝合わせ」だと知ったときの、古人、いにしえびととの、なんとも優雅な、自然との近しい生活感が心をほころばす。たとえば蜆やアサリや蛤の模様は、二つと同じものがなく、中身を出して一対をバラバラにしたものを、何個も混ぜ合わせても、模様を見れば元通りの一つの貝になるという。

これが「貝合わせ遊び」のはじまりで、だんだん貝の中側に布を貼ったり、絵を描いたりしたようである。むろんこんな優雅な遊びをしていられたのは、ごく限られた階層であるうが、そのあたりの貝を拾い集めて、なんの加工もせずに、誰もが遊べたことも充分考えられる。しかし、貝は割れて、けがをするなど不具合が生じたことから、だんだん廃れていったらしい。そのうちに貝から、紙に書かれた「一首の歌」の上の句と下の句を、わざと切り離して、それを元の一首に戻す遊びに変化したのだという。

遊びとは、このように細やかな観察と工夫の中から生まれるのだと思う。

2007年10月5日

追悼、浦口明德さん

名古屋ライトハウス情報文化センター所長の浦口明德さんが、この十月六日に逝去されました。

浦口さんは長く視覚障害者の読書に関心をお持ちで、ボランティア活動、読書権運動、点訳並びに音訳ボランティアの組織作りと、人並みはずれた行動力・実践力を発揮されました。

近年、漢点字への関心を深められ、本会の活動の趣意の、人文系の資料を漢点字で読める環境作りにもご理解をいただけるようになった矢先でした。

享年六十歳。

「報告とご案内」

一 『常用字解』の漢点字訳

来年（二〇〇八年）度、横浜市中央図書館に納入を予定している『常用字解』（白川静編、平凡社）の漢点字訳が進んでおります。

これに着手するに当たり、当初は本書を常用漢字の解説書と捉えて、字式の提示などは最小限に留めるこ

とで対処する予定でした。

ところが作業を進めるに従い、本書の構成が、白川先生の三部作・『字統』、『字訓』、『字通』の常用漢字の部分を抄訳し、平易な表現で表されているものであることが見えて来ました。

そのために、JISコードにある旧字・異体字の説明ばかりでなく、JISコードに含まれない字形の説明も求められていることに気付かされております。

そこで漢点字版では、大幅に字形の説明を挿入するよう努めることに致しました。不十分には違いございませんが、今後の漢点字書作成への提案の一つとご理解賜れば幸いです。

二 『人名字解』の漢点字訳

『常用字解』に引き続き、『人名字解』（白川静編、平凡社）の漢点字訳に着手しております。横浜市中央図書館に二〇一〇年度分として納入を予定しております。

同書の漢点字訳も、『常用字解』と同様のコンセプトで当たる予定であります。

この二つの辞書で、我が（裏表紙31ページに続く）

漢文のペーシ

峨眉山月歌

盛唐

李白

思^{ヘドモ}夜^レ影^ハ峨^ハ
君^ヲ發^{シテ}入^{リテ}眉^ハ
不^レ清^ニ平^ニ山^ハ
見^エ溪^ヲ羌^ハ月^ハ
下^ニ向^{カフ}江^ハ半^ハ
渝^ニ三^ニ水^ニ輪^ハ
州^ニ峽^ニ流^ル秋^ハ

夜雨寄北

晚唐

李商隱

卻^{ツテ}何^カ巴^ハ君^ハ
話^{ルキ}當^ニ山^ノ問^{フモ}
巴^ハ共^ニ夜^ハ歸^ル
山^ハ翦^{ツテ}雨^ハ期^ヲ
夜^ハ西^ニ漲^ル未^ダ
雨^ノ牕^ノ秋^ハ有^ラ
時^ヲ燭^ヲ池^ニ期^ハ
上^ニ

峨眉山月の歌

峨眉山月半輪の秋

影は平羌江水に入りて流る

夜清溪を發して三峽に向かう

君を思えども見えず渝州に下る

半輪||半月形の月。影||月の光。

峨眉山・平羌江・清溪・三峽・渝州はいずれも固有名詞。峨眉山に半月の光が秋の夜、山間の川を下つていく。「君」は山にさえぎられて見えなくなつた恋人または親友を指すとも考えられる。

夜雨北に寄す

君帰期を問うも未だ期有らず

巴山の夜雨秋池に漲る

何か当に共に西牕の燭を翦つて

却つて巴山夜雨の時を語るべき

寄北||北は長安に在る妻を指す。妻に送るの意。未||有||期||まだその期日はわからない。妻の寢室。牕||窓||西向きの窓はここでは夫婦の寢室。翦||剪||同じ。灯心を切つて、灯火を明るくする。の||の||雨の時(の今の心境)を思い返して、巴山の夜雨の時(の今の心境)を思い返して、妻とともに語り合うことができるのだろうか。



峨眉山月ノ歌

峨眉山月半輪ノ秋

影ハ入リテ平羌江水ニ流

ル

夜發シテ清溪ヲ向カフ三

峽ニ

思ヘドモ君ヲ不見エ下

ル渝州ニ

夜雨寄ス北ニ

君問フモ歸期ヲ未ダ有

ラ期

巴山ノ夜雨漲ル秋池ニ

何かキ當ニ共ニ剪ツテ

西牕ノ燭ヲ

卻ツテ話ル巴山夜雨ノ時

ヲ



牕(ソウ・まど)は、J I S第1・第2水準にない漢字です。
参照図書：遠藤哲夫『語法詳解 漢詩』（旺文社）

初級編 第四回

3 複合文字 (1)

ここで言う〈複合文字〉とは、二つ以上の〈部首〉(漢字のパーツ)を、ブロック状に組み合わせた構成の漢字です。〈部首〉は、元々一つの文字です。前回ご紹介した〈基本文字〉がそれです。〈部首〉は〈複合文字〉の中で、「偏」、「旁」、「冠」、「脚」、「繞」などと呼ばれて、その文字の音や意味を表します。

〈複合文字〉は、漢字の分類法の「六書」では、〈会意文字〉と〈形声文字〉に当たります。とりわけ〈形声文字〉は、漢字の八割を占めていますので、〈基本文字〉の理解が、〈漢字〉の理解に繋がるのが分かります。

〈漢点字〉の多くは、二マス「 」の形で表されます。一マスに一つの部首を割り当てて、全ての部首を、左右の関係で表します。そのために、元来は上下の関係で表さなければならない文字も、左右に配置して表します。

また、二つのマスだけで表すために、三つ以上の部首を含む文字は、その中の二つの部首を選択して表すことになります。


さらに、点字の符号には限りがありますので、異なった二つ、三つの文字が、同じ点字符号に重なることがあります。そのような場合、左右の部首の配置を逆にしたり、部首の選択を変えたりすることで回避します。

それでは、〈複合文字〉の第一回をどうぞ。

.....

1. 漢数字および第一基本文字を部首とした文字 (1)

ここでは、これまで出て来た文字、漢数字と第一基本文字を〈部首〉(パーツ)として組み立てられた文字を、ご紹介します。

※ 「木」を部首として含む文字

(1) 林^木^木 リン はやし

「木^木」を二つ並べた形の文字です。木が二つで「はやし」、このような文字を「六書」では、〈会意文字〉と分類しています。〈会意文字〉とは、「意味を合わせて作られた文字」の意で、元の文字の意味を寄せ合わせてできた文字ということです。漢点字でも、「木」を二つ並べた形です。

「竹林」「密林」「林間」「広葉樹林」「林業」「松林」「雑木林」

(2) 森^木^木^木 シン もり

「木^木」を三つ、「林^木^木」の上にもう一つ「木^木」を乗せた形の文字です。漢点字では、二マスに収めるために、二マス目に3を表す「^三」の符号を入れました。

「森林」「森閑」「鎮守の森」

(3) 材^木^木^木 ザイ サイ き

「木^木偏」の右側に「才^木^木」の形の文字です。木製品の元になるもの、つまり木材です。現在では、製品の元になるもの全般に用いられます。この文字は、通常音読みの「ザイ」とだけ読まれます。漢点字では、「^三（才^木^木）」と「^三（木^木）」で表されます。ご覧のように、偏と旁が反対に配置されています。後に出て来る「枯」と、点字符号が重なるからです。

「木材」「材木」「材質」「材料」「素材」「資材」「人材」

・「相」とそれを含む文字

(4) 相^木^目^目 ソウ ショウ あい み-る たす-ける

「木^木」と「目^目」で構成された文字です。二つのものの関係、ものの形を表します。また、国を治める責任者、大臣の意味があります。「あい」と読んで、強調の接頭語としても用いられます。漢点字では、「^三（^三^三）」と「^三（目^目）」で表されます。

「相談」「首相」「外相」「人相」「骨相」「相互努力」「相思相愛」「相手」「相済まない」

(5) 想^木^心^心 ソウ ショウ おも-う

「相^木^目」の下に「心^心」を付けた形の文字です。「心におもう」の意で、考えや像が心に浮かぶ動きを表します。漢点字では、「^三（相^木^目^心）」

と「𠄎 (心𠄎)」で表されます。「相𠄎𠄎」の「目𠄎」を省略して、「心𠄎」を付けた形です。

「想像」「想念」「幻想」「思想」

・「果」とそれを含む文字。

(6) 果𠄎𠄎 カ は - たす は - てる

「木𠄎」の上に「田𠄎」を乗せた形の文字です。作物や木の実が実ることを意味しています。そこから、「物事の終わり」や、「仕事の出来栄」などを表します。この「田𠄎」は、田畑のことではなく、木に、たわわに木の実がなっている姿を表しています。「田𠄎」はこのように、本来の意味ではなく、「一杯に詰まった」とか、「沢山のものが寄り集まった」という形を表したりもします。漢点字では、「𠄎 (𠄎𠄎)」と「𠄎 (木𠄎)」と、上下の関係を左右に置き換えた形をしています。

「果実」「果汁」「果肉」「果樹」「結果」「成れの果て」

「果てしない荒野」

(7) 課𠄎𠄎 カ はか - る ころ - みる

「果𠄎𠄎」の左に「言𠄎偏」を加えた形の文字です。「言偏のカ」として、役所や会社などの組織の単位に用いられています。漢点字では、「𠄎 (𠄎𠄎)」と「𠄎 (果𠄎𠄎)」と、「木𠄎」を省略した形を表しています。

「課長」「捜査一課」「課税」「課題」

・「休」とそれを含む文字。

(8) 休𠄎𠄎 キュウ ク やす - む いこ - う

「人𠄎偏」に「木𠄎」の形の文字です。人が木に寄り添って休息をとっている姿と言われます。漢点字でも「𠄎」と「𠄎」の符号で表されます。

「休日」「休憩」「休息」「連休」「定休日」「正月休み」

(9) 保𠄎𠄎 ホ ホウ たも - つ やす - んずる

「休𠄎𠄎」の「木𠄎」の上に「口𠄎」が乗った形の文字です。この右側の旁には、赤ちゃんをおむつでくるんで大事にするという意味があります。そこから、ものや人を守るという意味になりました。この文字の

音は、通常「ホ」と読まれて、「ホウ」は、固有名詞に用いられます。漢点字では、「𠄎𠄎𠄎 (𠄎𠄎𠄎偏)」と「𠄎𠄎 (口𠄎𠄎)」で表されます。「𠄎𠄎」が省略されています。

* この文字の旁「呆」は、独立した文字でもあります。音は「ホウ」、訓は「あきれる」ですが、本来の意味は、「大事にくるむ」です。漢点字の符号は、「𠄎𠄎𠄎𠄎」と三マスです。

「保安」「保護」「保健」「保険」「保証」「担保」

※ 「未𠄎𠄎𠄎」を部首として含む文字

(10) 来𠄎𠄎𠄎 ライ く - る きた - る きた - す

「未𠄎𠄎𠄎」の長い横棒の左右の上に点を付けた形の文字です。「𠄎𠄎𠄎」は、先の細くなった植物の形を表しています。「来𠄎𠄎𠄎」は、元は実った麦の穂を表していましたが、下って、「くる、きたる、きたす」の意味を表すようになりました。漢点字では、旧字の「來」が、長い横棒の代わりに、左右に「人𠄎𠄎」を配しているところから、「𠄎𠄎」と「𠄎𠄎」で表すようになりました。

「来月」「来年」「来客」「来賓」「来日」「元来」「本来」「未来」
「将来」

(11) 味𠄎𠄎𠄎 ミ ビ あじ あじ - わう

「口𠄎𠄎偏」に「未𠄎𠄎𠄎」の形の文字です。「未𠄎𠄎𠄎」が音を表して「ミ」を、「口𠄎𠄎」とともに、口で細かく味わうことを表します。食べ物の味ばかりでなく、心に感じる面白さの意味にも用いられます。漢点字では、「𠄎𠄎 (口𠄎𠄎)」と「𠄎𠄎 (未𠄎𠄎𠄎)」で表されます。

「味噌」「味覚」「味読」「意味」「趣味」「含味」「吟味」

※ 「本𠄎𠄎𠄎」を部首として含む文字

(12) 体𠄎𠄎𠄎 タイ テイ からだ

「人𠄎𠄎偏」に「本𠄎𠄎𠄎」の形の文字です。「本𠄎𠄎𠄎」で、全体に揃ったからだを表し、「人𠄎𠄎」を付けて、人のからだであることを表します。漢点字では、「𠄎𠄎 (人𠄎𠄎)」と「𠄎𠄎 (本𠄎𠄎𠄎)」で表されます。

「体格」「体操」「体育」「体系」「身体」「本体」「物体」「車体」
「気体」「液体」「固体」

(24ページから続く) 国で使用される漢字のおおよそが紹介されていると考えてよいようです。これに辞書の漢点字訳の先駆けとなった『漢字源』(藤堂明保編、学習研究社)を加えれば、当面の要に達するものと考えます。

三 『神さまがくれた漢字たち』

東京漢点字羽化の会では、漢点字を学んでいる方々向けに、『神さまがくれた漢字たち』(白川静監修、山本史也著、理論社、二〇〇四年)の漢点字訳を進めております。本書は、漢字の成り立ちを平易な文章でご紹介しているもので、漢字に関心を持つ人にとって、入門書に最適な書です。横浜で試みております『常用字解』、『人名字解』の二つの辞書の内容を、読み物に置き換えたものと捉えてよいものです。漢点字訳に当たっては、『常用字解』の方法を参考にしております。

ご期待下さい。

(メールアドレスを変更しました。)

E・MAIL : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

編集後記

▼さすがに暑い夏の日々が去り、秋らしいさわやかな日々を迎えることとなりました。秋は敬老会、運動会、文化祭等、地域の行事が目白押しでこういうことに関わる身としては、まことに忙しい季節です▼先号で、横浜国大の村田忠禧先生の漢字文化に関する講演概要をご紹介しましたが、漢字を巡る新しい動きについては、これからますます漢字の字体について混乱が起こることが予想されていやな予感がします。Windows VistaにはJIS第3水準漢字が収容されているようですが、そうなると今までも問題だったEDWINで変換できない漢字が紛れ込む危険性が更に増すこととなります▼先生は「日本における漢字論議の大半は、形にとらわれすぎていて、生産的でない」とおっしゃっています。私はこの考えに大賛成ですが、世の中のこれに反する動きはどうにも止められないことが残念です。(木下 和久)

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://ukanokai.web.infoseek.co.jp>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は12月15日です。

※本誌(活字版・テープ版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。